

国際社会を動かすのは誰？

小池誠一 (IGNITE 機構)

IGNITE 機構の小池です。本学に就任するまで政府開発援助としての国際協力の実務、SDGs など国際社会における理念、運動の研究、普及活動を行ってきました。紛争や災害現場を抱えた様々な国で仕事と生活をしてきました。これら経験を基に肩肘張らない話（時にはまじめな話）をしていきたいと思います。国内にいてもグローバル社会からは逃れられない皆さんの問題認識に何らかの形で（批判でも）参考になれば良いなと思います。

今回は最初の寄稿で意気込んだテーマにしようと思ったのですが、意に反して現在の在宅生活をしてふと思ったことのお話からさせていただくことにします。

コロナ禍で世界中の多くの方がステイホームを強いられている中で多くのアスリートやミュージシャンが動画を配信しています。歌手のレディ・ガガさんが YouTube で配信した“One World :Together At Home”を観た人も多と思います。これはガガさんが発起人となり WHO と NGO「Global Citizen」とで実施された新型コロナウイルス対策支援コンサートを配信したものです。<https://www.youtube.com/watch?v=cCNM706lv8M>) 既に観た人もまだ観ていない人も時間を持て余した時に、このサイトにアクセスして、ガガさんの動画とともに張り付けてある「Global Citizen」のメッセージも読んでみて下さい。今日の話のテーマにも関連した内容です。

私の主要な仕事であった国際協力も国際的な連携や調整が必要となります。また、SDGs などの国際連合の理念や活動も当然ながら国際社会での合意形成が必要となります。これらを決める主体は誰でしょうか。一義的には国（＝主権国家）という回答になります。気候変動抑制のための「パリ協定」のような国際協定は国しか締結する権限がありません。決定権は国にあるのですが、国はそれぞれの異なる立場があり、また自国の利益をあまりに優先させることがあるため、国際的な連携や協調についての合意は容易ではありません。グローバル化が進みその必要性がより高まっている近年、残念ながら国家間での合意形成が機能不全となる傾向があります。SDGs やパリ協定も権限があっても前に進まない、または進めない国々の背中を押してきたのは市民運動のグループであったり、グローバルに活動する企業経営者達でした。

なぜ人々が国や国際社会を動かすことができたのでしょうか。一つの理由は情報通信などの技術革新による処が大きいと思います。情報通信技術によって一般の人でも容易に世界中の情報や知識を獲得でき、地理的な制約を超えて報や意見の共有や交換ができ、何より意見の発信の手段を持つようになりました。学生の皆さんはそういった国際社会を動かす手段としての技術開発にも貢献していくでしょうし、当然ながらグローバル社会の一員として国際社会を動かしていく主体にもなります。皆さんのこれからの活躍に多に期待しています。

ステイホーム週間なのでレディ・ガガさんとは別の YouTube 動画を一つ紹介しますので時間を持て余したら是非観て下さい。<https://www.youtube.com/watch?v=9AjkUyX0rVw>)

これは“U.S.A. For Africa - We Are the World”という動画で 1985 年に米国の世界的に名声を得ていたアーティスト 45 人がボランティアで集結してアフリカで起こっていた深刻な飢餓救済のためにチャリティーソングを収録配信したものです。皆さんの生まれる前の話です。この当時アフリカは日本人をはじめ多くの人にとって遠い世界の話であり、飢餓で多くの子供たちが苦しみ生存が脅かされていてもどこか他人事でした。チャリティーで得た多額の資金が飢餓対策で活用されただけでなく、この活動によって世界の多くの人々がアフリカで起こっていた飢饉や飢餓に目を向け、結果的に意識を変えることになり、波及的に多くの活動を産み出しました。今のアスリートや芸術家が連帯して社会問題の解決に貢献する運動の原点だったと思います。最初かどうかはわかりませんがまさしくエポックメイキングな活動でした。皆さんがこの動画を観ると、ガガさんの動画を観た後では特に

映像の粗さ（古臭さ）を感じると思います。時代による映像技術の落差も味わって下さい。映像の粗さに我慢して観ていると、ガガさんの動画と同じような、もしくはそれにも負けない感情を揺さぶるものを感じられるのではないのでしょうか。（騙されたと思って観て下さい。）

技術の進歩により人々が国や国際社会を動かせるようになった一因と言いましたが、映像を観てわかるとおり当時の情報通信技術は今の皆さんが想像できないレベルの“低さ”だと思います。インターネットという概念が提唱されたのが1982年、世界最初のメールアプリケーションが開発されたのが1986年と言われています。このチャリティーソングの活動は一般の人がインターネットやメールでやりとりできる前の時代の話です。（皆さんにとっては神話の世界かもしれません。）この収録活動で最大の課題は世界中をコンサート活動で暇なく飛び回っているスーパースターの予定を押さえ、同じ時間に同じスタジオに集めることだったと言われています。コロナ対策で物理的距離を置いたままで同時に活動を繋げられる、共有できる通信技術の人々が普通に使える現在の技術レベルはやはり凄いです。この技術が当時あればこの活動も容易だったはずです。（最もこれだけのスーパースターが一堂に会するという絶対に不可能と思われることが実現されたことが人々の心を打ったのも事実です。）ではどうしてこの問題を解決したのでしょうか。「American Music Award」というその年に全米で活躍した音楽関係者を表彰するイベントの終了後に収録が行われました。これであれば多くのスーパースターを集めることができます。人の知恵ですね。現代、どんなに便利な技術でも事故で使えなくなることも起きます。技術依存ではリスクに対処できないこともあり、また、有益な技術をより効果的に活用するためにも人の知恵や工夫はいつの時代も大事だと思います。

長くなりましたが、最後に U.S.A. for Africa の USA はアメリカ合衆国ではありません。合衆国であれば USA に省略記号のピリオドは使われていなかったでしょう。ほとんど全ての人が勘違いをしていました。正しくは“United Support of Artists for Africa”です。でもアメリカ合衆国の意味も暗示していたそうです。アーティストが U.S.A. というワードで合衆国に込めた思いは祖国に対してのアイロニーだったのかそれとも誇りだったのでしょうか。映像を観ると答は明確にわかると思います。

（終わり）